

歴史をめぐる記憶の戦争と著述の倫理

——20世紀半ばの中国に関する「歴史の戦い」

唐 小兵（華東師範大学）

原文は中国語、翻訳：李 恩民

「記憶喪失」の対義語は「記憶」ではなく「正義」

——韓国学者ベク・ヨンソ

キーワード：記憶の戦争、戦争の記憶、理性、感情、アイデンティティ

戦争と革命は20世紀半ばの中国の最も重要なテーマであり、戦争と革命の歴史の記述と歴史の記憶は、1つの学術的な命題だけではなく、同時に中国社会がどのように過去の歴史に直面して、さらに記憶領域の紛争と衝突を刺激する導火線となりうる問題である。

歴史の記述には、現実の政治や社会文化への理解が暗に含まれており、歴史の記憶に固有の枠組みを突破しようとする記述は、国民や政府レベルで強い反響や反発を引き起こすことが多い。中国人民解放軍所属作家の張正隆の『雪白血紅』は1980年代末に出版され、ほとんど歴史の中に埋もれていたが、龍應台の『大江大海一九四九』（日本語翻訳版『台湾海峡一九四九』白水社、2012年）などで再び世に知られるようになった。龍應台は作家としての鋭さと文化人としてのアピール力で、半世紀以上前の東北の悲しい過去を、再び現代の華人の感覚の世界に引き戻した。そして、龍應台は次のような疑問を投げかけた。「聞いてほしい。どうしてもわからないことがあるのだ。これほど大規模な戦争暴力でありながら、どうして長春包圍戦は南京大虐殺のように脚光を浴びないのか？ どうして数多くの学術発表がされたり、口述記録が広く残されたり、年に一回は報道キャンペーンがあったり、大小さまざまな記念碑が建ったり、広大で立派な記念館が完成したり、各方面の政治リーダーたちが何かにつけて献花したり、小学生が整列して頭を下げたり、フラッシュを浴びるなか市民が黙禱をささげたり、記念の鐘が毎年鳴り響いたりしないのか？ どうしてこの長春という都市は、レニングラードのように国際的知名度のある歴史都市として扱われないのか？ 何度も小説の題材になったり、舞台化されたり、ハリウッドで映画化されたり、あるいはインディーズの監督が記録映画を撮ったり、各国の公共放送が争ってドキュメンタリーを放送したり、結果、ニューヨークやモスクワ、メルボルンの小学生たちが地名をそらんじるようなことになぜならないのか？ 30万人以上が戦争の名のもとにむぎむぎ飢死させられたにもかかわらず、どうして長春は海外においてレニングラードほど有名でなく、国内にいたっ

て南京ほど重視されないのか？」¹

これは『大江大海』の中のエピソードの一つに過ぎないが、この大ヒット作は主に文献の整理、史跡の探訪、インタビューなど様々な形式を通じて、乱世における国軍（国民党軍——訳者）将兵（遠征軍を含む）の運命、特にその後の歴史に意図的に忘れ去られた一面を再現または再構成したものである。

「敗北者」の子（彼女の父・龍槐生は国軍の将兵）として、龍應台は歴史の記述に無視された人々のために、記念すべき位置を取り戻そうとした。「もし誰言うように、彼らが戦争の『敗北者』だとするなら、では、時代に踏みつけにされ、汚され、傷つけられたすべての人がそうだ。彼らは『敗北』で教える———本当に追及すべき価値とは何なのか。私の目を見つめて、正直に答えてほしい———戦争に『勝利者』はいるの？『敗北者』の子として私は誇りに思う」。²

龍應台は人道主義的な立場と非戦的な立場に立って、すべての戦争の敗北者と被害者に代わって1つの訴えを提起しようとしたが、「本当に求めるべき価値」とは何か、それが現代文明（例えば自由・民主主義・平等などの人権）に基づく普遍的価値なのか、それとも国民国家の独立と富強の追求に参加することによって個人が尊厳を持つという特殊性の内包なのか、龍應台は明確に語っていなかった。さらに、龍應台は内戦時の国共紛争による犠牲と苦難（このような内戦で、戦争の正義と不正義の間に明確な境界線を引くことは難しい）と、抗日戦争期の南京大虐殺、反ファシズム戦争期のレニングラード防衛戦を並置して議論しており、前者の「忘れ去られた」ことを、後者の公共分野や国家レベルの大規模な歴史的記憶に反射させた。このことは異なるタイプの戦争間の差別性を抹消することに等しい。このように「敗北者を誇りに思う」ことは、表面的には「弱者」と「卑怯者」への人道的同情で道徳の頂点に立っているが、実際には家族、血縁、団体のアイデンティティをもって承認の系譜を構築している要素が多く、その中には必ずしも自明ではない思い込みが含まれている。それは、敗北者が自然に正義を代表するということ。

歴史の記憶は親世代のために歴史的「公道」（公平——訳者）を取り返すよう深刻に目指しているようで、世代間の記憶伝達と民族の精神構造を形成している。20世紀半ばの中国の歴史的記憶については、国共双方はともにそれぞれの記憶の宮殿作りに力を入れている。長春包圍戦は、国共双方の記憶の中では、国民党にとっては屈辱的な体験であり、共産党にとっては「無血」の凱旋であるという全く異なる面相を呈している。凱旋には「暗い血の汚れ」が混じっており、歴史の実相を掘り起こすことはできそうにない。

記憶に対応するのは忘却であるが、北京大学歴史学部の羅新教授が言うように、忘却は純粹に「消極的」な心の生活ではない。「忘却の研究が歴史学にもたらす重要な啓示の一つは、新しい目で歴史を見ることである。もともとわれわれが知ることのできる歴史史実は、さま

¹ 龍應台『大江大海一九四九』、香港：天地圖書有限公司、2009年版、200頁。日本語翻訳版『台湾海峡一九四九』白水社、2012年、186頁。

² 前掲 龍應台『大江大海一九四九』、扉頁。前掲『台湾海峡一九四九』扉頁。

ざまな力によって選別され、生き残った断片にすぎず、また膨大な量の史実は、すでにわれわれの記憶庫から遮断され、排斥されている。われわれが知ることのできないものかなりの部分は、先人が後世は知るべきではない、あるいは知るに値しないと考えたものである。われわれが知らない過去は記憶喪失 (amnesia)、あるいは歴史記録の空白と呼ぶこともできるが、この記憶喪失と空白は、ある程度は忘却 (forgetting) によって引き起こされるものであるが、先人たちの積極的な行動の結果でもあり、彼らの期待に沿ったものであるとも言える。³

長春包圍戦、そしてより広範な 20 世紀半ばの中国の内戦史について、われわれは「記憶」と「忘却」の二重の視点から探知することができる。時には「記憶」と「忘却」は相克的で、一方は強制的に忘却してもう一方は記憶を強化しなければならない。時には「記憶」と「忘却」は相生的で、「不正義の戦争暴力」の忘却を前提に勝利者の記憶を強化する。時には勝敗の両方とも意図的に公共生活の中からいくつかの歴史の痕跡を消して、民衆に「積極的に忘却」させ、一部の歴史の真相を探求させないようにする。当然、民衆と知識人は操り人形ではなく、彼らは時にこの数々の歴史の記憶と忘却によって構築された「存在の網」の中から抜け出し、歴史に対する真実の感覚を復元しようとする。

龍應台の『大江大海一九四九』は大陸の二人の歴史学者から全く異なる反応を引き起こした。歴史家の高華 (故人) が書いた長編評論は、秀逸な文章で台湾海峡兩岸の 1949 年前後の大変動を、政治⁴と経済というマクロな視点と歴史上の人物というミクロな視点から分析し、龍應台の記述と結びつけて「悲情の一九四九」の歴史的內包とその後の影響を余すところなく描き出した。高華は、『大江大海一九四九』はイメージが複雑で、場面が壮大である。1949 年に 200 万人の大陸人が海を渡って台湾に移ったところから、第二次世界大戦期の独ソの戦場と南太平洋の戦場に至る。『白色テロ』による『外省人』への残酷な迫害から、『本省人』による『祖国軍』への期待と失望、さらに『アジア孤児』の悲情に至る。家もあり国もあり、個人と家族の変遷によって、時代と国家の大勢が個人の運命に及ぼす影響を反映している。人文的、人道的史観で、壮大な言葉でまとめられた歴史によって、その中から生き生きとした生命を再現し、その意義と価値を求めた」と評価した。高華はさらに、『大江大海』の趣旨は、「普遍的価値観をもって、1949 年の国民党政府の大失敗によって引き起こされた国内の一部の人々の大移動、大逃亡を反省し、『時代に踏みにじられ、辱められ、傷つけられたすべての人々に敬意を表する』ことである。龍應台は本書で、イデオロギーの壮大な言葉によって長い間に隠されていた一つ一つの歴史的場面を力強く描写し、1949 年と結びつく一連の重大な歴史的イベントと歴史問題を討論したが、彼女はあの内戦の是非と功罪を直接判断するのではなく、内戦の犠牲者および 1949 年に台湾に来た人々を重点的に記述し、彼

³ 羅新「忘却の競争」、『東方早報・上海書評』、2015 年 3 月 8 日。

⁴ 高華『六十年来の家と国、万千の心配事を誰が訴えるのか——龍應台『大江大海一九四九』を読む』『領導者』総第 34 巻期、2010 年 6 月。

らに深い同情と尊敬を寄せた」と指摘した。⁵ 高華から見ると、「普遍的価値」がこの本の核心であって、その歴史観は「人文的、人道的史観」である。彼はこのような「小さな人物」の生命物語に焦点を当てた歴史の記述は、政治に主導されたイデオロギー的な記述を解体する有効な方法であることを十分に認めている。

高華によれば、龍應台は「内戦の是非功罪」の価値判断はさておき、ヒューマニズム的な心情をもってすべての戦争の犠牲者と生存者を歴史の記憶の天秤の上に置いて等しく歴史を書いている。しかし、龍應台自身が「敗北者の子供」を誇りにしているとしたら、それはいったい何を意味するのだろうか。龍應台は敗北者の価値、思想、行為を認めているのか、それとも単に戦争の敗北者というだけで同情的な視点を与えられやすいのか。龍應台が言うように、戦争は勝ち負けがないのなら、なぜ彼女が「敗北者の子供」を誇りにするのか。一方で、『大江大海』は人道的な哀れみの感情と「小さな人物」に焦点を当てた歴史叙事の中で歴史の和解を実現しようとしているようだが、他方で、『大江大海』はまたこのように強く切っても切れない家と国の哀しみと国共の両方の中に立ち位置を選んでいる。これでは石を持ち出して自分の足を潰すようなものではなかろうか。高華はこの難点について見事な解釈をしている（龍應台本人が同意するかどうかは不明）。「国府は民衆の支持を失い、自分は空中楼阁のようにもろく、最終的には滅亡の運命を免れない。1949年初めに蒋介石の命令で台湾省主席の職を引き継いだ陳誠は、『人民至上、民生第一』を台湾統治の理念とし、『三七五租税引き下げ』（37.5%の徴税を超えてはいけぬ——訳者）から着手し、社会の基礎を固め、新たな出発を始めたと宣言した。明らかに、台湾がその後成し遂げた成果と進歩はその失敗と結びついたものであり、龍應台は国民政府の1949年の大逃亡を恥辱に思うことはない。彼女は台湾人が失敗から立ちあがり、また新たな価値を開いたことを誇りに思う」と言う。⁶

高華の高い評価と異なり、中国人民大学清史所の楊念群教授は短い文章の中で龍應台の「砲灰の理論」（大砲の餌食・キャノンダスト、犠牲者となった兵士——訳者）という歴史観を厳しく批判した。「1949年の中国内戦を含むすべての戦争は、単なる人道主義の戒めによって理解できるものではない。私は、龍應台という還暦に近い、見識の広い『赤ずきんちゃん』が歴史のジャングルに足を踏み入れた後、彼女と意見が食い違う多くのオオカミおばあちゃんに出会ったに違いないと信じているが、結果的に『赤ずきんちゃん』はあまりにも強すぎて、毎回激しいレトリックでオオカミおばあちゃんをうまく撃ち殺すことができた。そこで、南洋島のサンダカン強制収容所で国民党軍の捕虜を虐殺した台湾の監視員や、淮海の戦場で必死に戦って生き残っても飢え死になる前線の国民党軍、密集的に突撃して死活を顧みなかった解放軍の兵士は、すべて戦争のほこりの中に散った悲しい偶像となり、歴史の偶然によって操作された。民族、境界、海峡をまたぐこれらの壮大な物語は、一世代の人々

⁵ 同上。

⁶ 同上。

の『隠忍して口にしない傷』を明らかにし、彼らに血痕を思う存分撒き散らし、そして記憶の血が現代の麻痺した心の中に流し込むようにさせた。踏みにじられ、侮辱されて傷ついた敗北者たちのための武勇伝を書くと、もちろん戦争には勝利者などいないという結論になる。交戦という暴力を物事の是非や境界を問わず非難されると、あらゆる戦争の意義が完全に解消され、『砲灰の理論』は人々の涙を一瞬にして引き出し、『正義の理論』で勝敗について書いたものは自然に曖昧になる』。⁷

つまり、楊念群によれば、このような小人物の悲喜離合に訴える歴史の記述は、本質的に無差別な悲しい物語を構築することであり、戦争に身を投じた、あるいは献身した将兵の生命の主体性を完全に解消することであり、戦争に巻き込まれた人たちは全員騙され、あるいは利用された「砲灰」となり、一度戦場で死んだ当事者は、歴史的記憶の領域で「生き返る」形で「生命の意味と価値」の上でもう一度死ぬことになるのである。そして、楊念群は、龍應台が史料を探して歴史の記述を構築する際、「人道的な立場」に反する証拠を自動的に排除し、実際に歴史に入る可能性を失ったのではないかと疑念を提起している。

これは 20 世紀半ばの中国の歴史が直面する核心的な問題に触れている——各自の意見を主張する個人経験的な記述は果たして歴史の和解を推進するのか、それとも実は歴史の和解を妨げているのか？歴史の和解はどうすれば可能になるのか。戦争の傷はどうやって癒すのか。戦争に身を投じた個人の心情や境遇を具体的に理解した上で、個人と時代との出会いを議論できるだろうか。同情的な理解は、批判性や反省力の弱体化を意味するのか。歴史の記憶と歴史の記述は、個人間・各世代間・各政党間の対話と和解の中でどのような役割を果たすべきであり、果たすことができるのだろうか——。

吳乃徳は二・二八事件を討論した文章で、歴史の記憶の真実性と曖昧性の関係についてこのように言及したことがある——「民族の現在の想像と渴望に共感するために、歴史の記憶は必ず裁断が下されなければならない。そのため『記憶』と『歴史』は常に完全には重ならない。「集団記憶は非歴史的 (ahistorical) であり、さらには反歴史的 (anti-historical) であり、ある出来事を歴史的に理解することは、その複雑さを理解することであり、離れた立場から、あるいは異なる視角から見ることであり、その道徳の曖昧さを受け入れることである。集団記憶は歴史の中の曖昧さを単純化させ、ひいては消去させる」。

しかし単純化された、ひいては誤った歴史の記憶は、それがどんなに大きな道徳的な教訓と啓発を背負っても明らかに理性的な社会の真実への追求に違反しており、歴史学者、後の世代、特に異なる立場の者からの挑戦を絶えず受けることになるだろう。同時に、曖昧な歴史の記憶は一部の人の情熱に火をつけることはできても、必ず他の人への呼びかけ力を失う。異なる民族群、異なる立場の団体は異なる歴史経験を持っているため、曖昧な歴史は必然的に共通の歴史の記憶を造成することにも成功しない。共通の歴史の記憶は民族形成の重要な条件の一つである。もしかしたら——ただもしかしたら——ある歴史家が強調して

⁷ 楊念群「龍應台の砲灰史観の扇情と欠落」、共識網、2013 年 12 月 15 日。

いるように、『歴史の記憶が学術的な基準に基づいていない限り、記憶に対する私たちの責任はただの抜け殻にすぎない』、と。⁸

龍應台も歴史執筆の限界を意識しているようで、彼女は本の中で告白している。「どんな物事であろうと、その全貌を伝えることは私にはできない……誰も全貌など知ることはできない。ましてや、あれほど大きな国土とあれほど入り組んだ歴史を持ち、好き勝手な解釈と錯綜した真相が溢れ、そしてあまりのスピードに再現もおぼつかない記憶に頼って、梨をして『全貌』といえるのか、私にはひどく疑わしい。よしんば『全貌』を知っていたとしても、言葉や文字でどうしたら伝えられるのか。———だから私が伝えられるのは、『以偏概全=ある主観でじっくり掴んだ』歴史の印象だけだ。私の知っている、覚えている、気づいた、感じたこと、これらはどれもひどく個人的な受容でしかなく、また断固として個人的な発信だ」。⁹

呉乃徳が焦点を当てたのは「曖昧な歴史の記憶」と「道徳の曖昧性」で、前者は歴史が裁断され、抑圧され、意図的に誘導され、忘却された後に形成された「漠然とした印象」を指し、後者は人が具体的な歴史の変動の中で実際にはその行動に道徳上の裁断を下すことが難しいことを指している。これに含まれている一つの思い込みは歴史の記述が「全知全能」ではないので、彼自身の道徳、価値と趣味の上で可能な偏向およびこの偏向が招く可能性のある歴史認識と歴史解釈のミスリードに対して、冷静な反省を持つべきであるということである。¹⁰ 歴史研究の永遠のジレンマは、「すべてを読み解くことができない人間の存在意義の複雑さ」に直面しなければならぬと、ベンジャミン・シュウォルツは言った。龍應台は「異なる角度」から歴史を見返そうとし、しかも自分はかなり個人化して「以偏概全、即ちある主観でじっくり掴んだ歴史の印象」を伝送することしかできないことを意識したが、「敗北者」のために痛い歴史を書く気持ちが強すぎ、親世代のための武勇伝を書く気持ちが激しすぎて、彼女は歴史を遡る初心を忘れてしまって、歴史と人間性の複雑さを消してしまった。複雑さへの理解に満ちた文章と記憶ほど、読者を感情的に迅速に巻き込むことは不可能で、大多数の読者は歴史の中から獲得しようとした記憶は往々にして彼の自己投影の共感と感情で、人々が長い歴史の中で獲得しようとしたものは往々にして彼の投影である。これが歴史と記憶の間にある永遠の張力である。

呉乃徳が言ったように、「単純化された、ひいては誤った歴史の記憶は、それがどんなに

⁸ 呉乃徳『歴史の記憶の中の曖昧と未知』、台北：『思想』第21期、2012年5月。

⁹ 前掲 龍應台『大江大海一九四九』、174頁。前掲『台湾海峡一九四九』、160頁。

¹⁰ Timothy Brook 教授も、「歴史研究者は道徳的規範を作ったり、道徳的知識を作ったりすることはできない。歴史研究者の任務は、過去の歴史的参加者や現在の読者を非難するために誤った見解を提示することではなく、ある時とある場所で道徳的規範が生まれた基準や条件を調査して研究することだ」と指摘している。詳しくは Timothy Brook 氏著『秩序の陥落：抗戦初期の江南五城』（潘敏訳）、商務印書館、2015年版、281頁。

大きな道徳的な教訓と啓発を背負っていても、明らかに理性的な社会の真実への追求に違反しており、歴史学者、後の世代、特に異なる立場の者からの挑戦を絶えず受けることになるだろう。」敗北者である国府軍は、台湾島の本土住民にとっては強い介入者であり、弱者の下に弱者が重ねられ、正義と倫理の線引きが困難になった。前に許績雲らが認めた来台の大陸エリート層が台湾にもたらした積極的な結果は、台湾本土のエリートから見れば、台湾地方の政治と経済エリート層を強く抑圧した政治的圧力である。

筆者はかつて中国大陸の30年前と30年後の「歴史和解」問題を討論した際に、「社会共同体の自己更新と文化伝承にとって、記憶を現すことは必要だが困難なことだ。記憶はもちろん憎しみを扇動するためのものではないが、歴史の記述はさらにそうではない。記憶の多くは一つの民族の自己救済のようなものであり、記述自体も一つの社会集団の傷を絶えず修復する独特な形式になっている」と提起した。¹¹ この議題は兩岸の知識人、政治家と民衆にとって、似たような重要性と切迫性を持っているので、もっと広く深い視野の中でその価値を掘り下げ、その方法を探り、その効果を反省すべきだと思う。

2009年に台湾で出版され（2013年に北京三聯出版から簡体字版が刊行）、知識界と公衆社会で長い間反響を呼んだシリーズ図書である米国に在住する華人作家の王鼎鈞の4部作で構成された回顧録、中でも特に国民党憲兵と解放軍捕虜の視点から1945~1949年の内戦史を描いた『関山奪路』は高華、王奇生ら歴史家から高い評価を得ている。「自分が書いたのは『小さな人物』の回顧録である」と王鼎鈞は強調している。「彼は個人の名利損得ではなく、世事の移り変わりを書いている。彼は激動激変の歴史の時代に、『小さな人物』である自分自身の運命を左右できないことを描こうとした。彼は職業的な鋭敏な観察で、乱世のさまざまな人情世相と一般庶民の日常生活を細かく描写し、具体的な事例をもって自分が数十年間積み重ねてきた経験と悟りを一つ一つ記述し、心を落ち着かせながら話し、扇情も叫びも見せないが、魂に触れている」と王奇生は指摘した。¹² 回顧録としての『関山奪路』は歴史の記述の上で何重もの張力を見せて、これらの張力あるいは記述の苦境の存在は、ちょうど著者の記述のレベルを豊かにして、同時にある意味で読者固有の歴史認知の枠組みに対して挑戦している。国共両党の勝敗の原因を探ることから言えば、王鼎鈞は敗北者である国民党とその軍隊に同情していないようで、彼は最も多くの筆を費やして強弱転化の原因を探ろうとした。敗戦した日本と国民党、ソ連軍の三者については、勝利者としての後者に何の意義も認めず、むしろ敗北者の「尊厳」をより多く記憶し、記述することを意図したのではないだろうか。したがって、王鼎鈞の歴史的記憶の価値の基点は、単なる人道主義の論理ではなく（もちろん、全巻を見渡すと、彼は常に弱者・敗北者に対して同情している）、勝利者は王、敗北者は寇（即ち賊）のための覇道の論理ではなく、20世紀半ばの戦争の記憶に直面して、われわれの足場はいったいどこに置くべきなのかという意義ある挑戦を提

¹¹ 唐小兵「歴史の記憶で未来を照らす」、『読書』、2014年第2期。

¹² 王奇生「真実の歴史は小説よりすばらしい——王鼎鈞回顧録を読む」、『新京報・書評周刊』、2013年3月29日。

起している。この戦争は正義と不正義で敵味方を峻別することができるのだろうか。道徳の曖昧さと感情の強さが、こんなにも奇抜に混ざり合って、私たちの理性の堤防を突いているのか。例えば、本の第1部に描かれた抗戦勝利後の「日本の捕虜と居留民」という一節は、敗北者である日本軍がその体面と尊厳を維持し、清潔と秩序を保ち、悲鳴を上げることもなければ哀れみを乞うこともない。著者は「いずれにせよ、日本軍人の品性は優秀であり、日本政府は彼らを浪費した」と言うほどだった。¹³ それと対照的に、王鼎鈞は国民党軍を否定的に評価した。「戦場の将校は軍権が非常に強い。現地の司令官は敵に協力したとか、作戦に力を尽くさなかったとか、などの名義で多くの人を殺した。にもかかわらず、高級将校は千万人の兵士の投降を自身の手柄として、新しい官位に鞍替えることができた。その部下たちは改編・訓練を経て、銃口の向きを変え、この戦場で死んだか、あの戦場で死んだか、どちらにしても、このような軍人があのような軍人より『優れている』と認めることはできない」。¹⁴ 敗北者の家族として、日本人女性は物を売ったり、食べ物を売ったりして生活を維持して日本に帰る旅費を稼ぎ、ブローカーの言いなりになって中国軍の将校に性的サービスを提供して日本人男性の尊厳を維持した。

王鼎鈞の歴史の記憶は歴史に直面する時の人の感情の複雑さを十分に示している。侵略と反侵略戦争から言えば、中国の抗戦は当然正義であるが、この正義はその下での中国の軍民のふるまいが正義や倫理にかなったものであることを保証するものではない。敗北者である日本軍とその家族はこの戦争の記憶の中で、同情される弱者ではなく、「弱者の尊厳」を勝利者側に尊重されるべき対象者となったのである。勝利は正義を象徴するものではなく、敗北は屈辱を意味するものではない。王鼎鈞は私たちに問い詰めるべき質問を投げかけた。人に対する理解、態度、感情は民族国家の枠を超えられるのか。私たちは、個を消された国家的アイデンティティの身分で、歴史の中の個々の具体的な個人と真剣に向き合うことができるだろうか。戦争の歴史的記憶は私たちとその時代との間に内在する連帯感を構築することができるだろうか。訴えの史学や「成王敗寇」(勝利者は王となり、敗北者は寇=賊となる)的な史学を超えられるなら、史学はどのような意味を持つだろうか。敗北者をよく理解し、さらには尊重するこの論理に順応した後、反省と批判は揺らぐ空中楼阁になってしまうのではないか。言い換えれば、交戦双方の当事者の記憶にたどり着くことができる歴史的な目標と道徳的な目標は一体何であるべきなのか。

おわりに

人類学者の王明珂はかつて次のように指摘している。「歴史は一つの声だけではない。多くの異なる時代、異なる社会の人々は、自分の過去を語り、自分の過去を一般化、普遍化させ、現代社会の記憶とし、他人の記憶を抹殺することを競っている。自叙伝、伝記と口述の

¹³ 王鼎鈞『関山奪路』、三聯書店、2013年版、78頁。

¹⁴ 同上。

歴史の中で、私たちが見ることができるよう、一部の人は社会に自分の過去を宣伝することができ、一部の人の過去は社会によって意図的に発掘され、再建されている。これは過去に対する解釈権の争いであり、アイデンティティの争いであり、権力の争いでもある」。¹⁵

20世紀半ばの中国の歴史の記憶に対して、政府主導の歴史の記憶であれ、民間の自発的な回顧録、口述史であれ、あるいは作家・学者の歴史の記述であれ、すべて自身の20世紀半ばの中国に対する歴史理解と認知の枠組みを「一般化、普遍化」させようとしている。しかし、このような記述と記憶の感情的な動機は往々にして人道主義の価値の立場に基づいて、あるいは歴史の成否に対する理性的な反省に基づいて行われたのである。前者は往々にして同情が理性を遮ったとして批判され、後者は理性化された反省が歴史の構造と行動の中で命を失った個人を無にするという理由で非難される。さらに、一部の学者は、この時期についてより多くの個人的な歴史の記憶（例えば、ここ数年大量に出版された回顧録、口述史など）の出現は、個人間・各政党間・各世代間の和解を推進できないばかりか、かえって中国社会をさらに引き裂き、歴史の記憶の価値の共通認識を構築することも困難にさせるだろうと考えている。¹⁶ 20世紀半ばの中国の歴史的苦難に対する認知と記憶にとって、私たちは政治と戦争の悲劇に対する訴えのレベルに留まることがなく、歴史の深層を深く掘り下げ、波乱万丈の歴史の流れの裏にある潜在的かつ構造的な要素を掘り起こさなければならない。これこそ歴史の記憶と歴史の記述のより高い境地である。歴史の記憶あるいは歴史の記述は、目の不自由な者が群盲象を撫でることと同じ、触ったのはただ「一面的な局部」だけであるが、深刻さと具体性を有する。各歴史の回想者と記述者は自分が「目の不自由な者」（個人の偏見、知識と情報の制限、表現能力と記憶能力の欠如などがある）であることを意識している時、しかも象の全身は1度に完全に撫でることができない時、彼は比較的慎重に、謙虚に自分の歴史の記述に直面することになる。20世紀半ばの中国の歴史の記憶に対して、龍應台の歴史の記述にしても、王鼎鈞の歴史の記憶にしても、現代中国の公共生活の中で歴史資源を導入することによって啓蒙する原動力は確かにあった。ここで特に深く考えるべき課題が挙げられる――価値の啓蒙は歴史の真実を尊重することを前提としないか？ 歴史と現実を推し量ると、我々は啓蒙と歴史の間に永久的な張力が存在していることに気が付き、この張力と苦境が引き起こした争いひいては衝突もよく現代中国の公共生活の中で大きな波を起こし、人心をかき乱す。おそらく、これこそが私たちがこの時期の歴史を遡って、検討かつ記述する際に注意を扱わなければならない根本的な原因であるだろう。

¹⁵ 王明珂「自伝、伝記と口述歴史の社会記憶の本質」、台北：『思与言』、34巻第3期、1996年。

¹⁶ この部分のヒントは中国社会科学院近代史研究所の李志毓博士との深い討論の中で得たもので謹んで謝意を表す。

■唐 小兵 (TANG, Xiaobing)

華東師範大学歴史学部教授。歴史学博士。博士課程指導教員。ハーバード・イェンチン研究所訪問学者。

専門は、清末から民国時代における新聞・雑誌の歴史、20世紀の中国知識人の歴史と思想文化史、左翼文化と中国革命、回想録・オーラルヒストリーと20世紀の中国における歴史の記憶など。『現代中国的公共輿論——以『大公報』『星期論文』和『申報』『自由談』為例』、『十字街頭的知识人』、『与民国遭遇』、『書架上的近代中国——一個人的閱讀史』、『北米学踪：從溫哥華到波士頓』などの著書を出版。論文は『China Information』や『新聞与伝播研究』、『史林』、『中共党史研究』、『二十一世紀』(香港)、『思想』(台湾)など国内外の雑誌に掲載。

華東師範大学第一回青年教師育人貢獻賞を受賞。2014年に『東方歴史評論』誌が主催の「中国傑出青年歴史学人」に入選(全国計15人)。

主な著作：「戦争、苦難与新聞——試論抗戰時期民間報刊的輿論動員」、『新聞与伝播研究』、2015年第8号。「民国時期中小知識青年的聚集与左翼化——以二十世紀二三十年代的上海為中心」、『中共党史研究』、2017年第11号。「後五四的家庭革命与社会改造思潮——以『中国青年』『生活週刊』『申報』為中心的討論」、『天津社会科学』、2022年第2号。